

竹本幹夫著『観阿弥・世阿弥時代の能楽』

山中 玲子

竹本幹夫氏『観阿弥・世阿弥時代の能楽』は、氏の25年間の研究成果のうち、作品研究関係の諸論文をまとめて一書とされたものである。竹本氏から字の読み方まで教わった者が「書評」などとはおこがましいが、この大著を後に続く者の一人としてどう読みたいと理解したかという形で紹介することを目標にしたいと思う。もちろん全ての内容に触れられるはずもないが、竹本氏の御著書なら他にも多くの場所を取り上げられるだろうと割り切って、自分の興味に引きつけた触れ方をさせて頂くことになろう。

本書は、「観阿弥時代の能」「世阿弥時代の能」「世阿弥時代以後の能」の三部構成だが、この三部の内容を先取りするような形で「序論」が付されている。もともと概説的な目的で書かれたものだが、「観阿弥が最も得意としたのが鬼能であったことは疑いない。それが観阿弥以前からの大和猿楽の伝統的表芸でもあったか否かは定かではない」といった鋭い指摘があちこちにあり、漠然と信じられていたこと、誤った常識にストップがかけられる。また「(世阿弥の)碎動能と物狂能とは改作・翻案ものが多く、神能・修羅能・女能その他の能は新作が圧倒的に多いのである。これはそのまま世阿弥が古作の能から何を受け継ぎ、また何を新

たに開発したかを如実に示すものであろう」というような氏の見通しをここで予習しておくことによって、以前ばらばらに読んだときには難解に思えた第一部所収の諸論も今回はずいぶんすなりと頭に入ってくる。有り難い配慮である。

第一部「観阿弥時代の能」には、こうした見通しを形成する土台となった「観阿弥時代の能」「観阿弥の作風」「観阿弥・世阿弥とシテ一人主義」「観阿弥から世阿弥への展開」が収められ、能の大成期の様相を描き出す。また当時の作詞法についても、(西国下)《海道下》の作者である連歌師玉林の人物研究と、この二曲の謡物における修辭法の分析を行った「琳阿考」、琳阿とも共通する観阿弥の作詞上の特徴や曲舞導入の意義等を明らかにした「能の文体形成と観阿弥」の二篇を収める。後者は謡曲の詞章の完成を鎌倉後期から南北朝期にかけての文学の所産として捉える視点をも示している。

緻密な整理能力と、全体を広く見渡し個々の事象を全体に結びつける腕力とが竹本氏の研究の強みであることは、右の諸論にも明らかだが、その特徴が最もよく発揮されているのは、第二部「世阿弥時代の能」においてだろう。「能の歌舞劇化への道筋」「歌舞と物まね」「世阿弥の作詞法」の三章に分かれ、量的にもここに収められた論文が最も多い。どれも重要な論考だが、第一章からは、まず「物学条々」に見る世阿弥時代前期の能」を挙げたい。竹本氏が初めて指摘しそれが「言われてみればその通り」と定説化したことは多いが、ここで提示された「古修羅」への疑義もその一例である。「修羅」は題材の呼称、「軍体」は習道

論にもとづく演技類型で、そもそも次元が異なり、世阿弥がある種の作品を修羅、別の作品を軍体と呼び分けているわけではないとの指摘、世阿弥以前においては古修羅の風体は一類型を成してはいなかったのではないかと推定、結末部で修羅道の苦患を描くのは本説に戦闘場面がないからであり、それが古風の証拠にはならないとの説、どれも、それまで漠然と在った古修羅に関する俗信のようなものを一掃してしまった。

「ある原初作品が成立し、その模倣的作品がつくられることによって」各風体が出来あがってくるプロセスを明らかにしようとした同論文の方法は、「親子物狂」考とも共通する。「親子物狂」考は、世阿弥時代に存在した親子の別れと再会を描く「思い故の物狂能」全体を、追放型・出家型・誘拐型の三種に分類したうえで、各曲の小段構成や構想等を詳しく検討し、親子物狂能の古態を探りつつ、また、そこから物狂の定型完成に至る過程をたどる。各曲間の複雑な影響関係についての個々の推定については疑問もある（たとえば「親子物狂が否かという相連を度外視」してまで「自然居士」が《花月》《逢坂物狂》の祖型と言えるのか。何を重要と見、何を度外視するのは、判断が難しい）が、物狂能における狂乱と芸能が本来別役によって分担されていたとの指摘や、物狂能に特徴的な登場段の形成過程の考察など、やはり今では定説化しており、その後の研究に与えた影響は大きかった。

第二章所収の「天女舞の研究」も、誰もが認める竹本氏の代表的な業績の一つである。世阿弥伝書中の天女舞関係記事の解説と、天女の能の詳しい検討を通して、世阿弥の舞の理論が大王の天女

舞を大和猿楽に導入したことをきっかけに成立したことを示し、他方、大和猿楽の中での天女舞解体のプロセスをも推測、さらに大和猿楽の舞事は本来、伸縮自在のシラバヤシ的なものだったのが、天女舞に取って代わられたとの説も提示する。自説を補強するのに都合のいい記事だけを伝書から見付けてきて引用するようなやり方ではなく、見られるだけの資料を博搜し、伝書・付類の系統を踏まえたうえで、ときには相互に矛盾する諸伝書の記事を整理しつつ論を展開する方法は、本章所収の「素囃子の変遷」「シラバヤシ考」「天女舞の研究」の三篇で竹本氏が確立したものである。各曲に関わる伝書記事の整理や詞章の緻密な分析は、緻密なだけにこちらにかなりの忍耐力を要求するが、バラバラだったはずの資料がいつのまにか結びつきあい、ついには「世阿弥の歌舞能はいかにして成立したか」という大きな問題につながり、しかもその問題に解答が出されてしまうのである。初読のときの興奮と満足感は、今もはつきりと覚えている。特に、結論部に氏が示された「シラバヤシ的な舞が大和猿楽本来の様式であり、天女舞は呂中干形式の舞の祖型であった」との想定は、既に定説化した卓見であり、伝書記事の厳密な考察部分（天女舞の伝流「破序急延の説について」は読み飛ばしてこの結論だけを引く人も多いように思われる。だが、このような推測は失礼かもしれない）が、実は現在の竹本氏もまた、同じ結論を導くのにおそらく「天女舞の伝流」や「破序急延」の項を必要としないのではないだろうか。室町末期の伝書記事の扱い方を示してくれた点で、これらの考察はたしかに無くてはならないものだった。しかし、後場

に舞が二つある能が世阿弥の「破序急延」の説と結びつくのかどうかは、本当はよく判らないことだろう。よく判らないまま、そこから導き出される結論があまりに魅力的なので納得してしまうのだと思う。が、現在の竹本氏には、「謡舞の形成」(後掲)で見たような小段構成の厳密な比較検討や、詞章の徹底的な分析等、別の武器があり、おそらくそれらを用いることによって、天女舞導入と大和猿楽の歌舞能化についても説明できてしまうだろうと思うのである。このことは「天女舞の研究」の価値を低めることではけつてない。別の言い方をすれば、より信頼性の高い方法で氏の推定の正しさが再確認できるということでもある。

右に先回りして触れた「謡舞の形成(下)」は、現存する世阿弥時代の能すべてについて、謡舞あるいは舞事・働き事の入る位置、およびその前後の小段構成を一覧し、そこに見えてくる様々な傾向を確認しつつ、論を進めていく。その結果、後シテ登場段での謡に合わせた所作が物狂能の特色であること、謡舞の最も基本的な例は「切拍子」の舞だったろうこと、後場の仕事の段での謡舞は舞曲舞となる例が多く、女体の舞も「曲舞舞の芸風の物まねから出発した構想」だった可能性が強いこと等々、こんなにはつきり判ってしまつてよいのかというほどはつきりと、色々な問題が解明されていく。こうした網羅的調査を厳密に行えるということ自体が竹本氏の力業なのだろうが、これは単に、誰も気づかなかった作業を徹底して行つた「コロンブスの卵」的な成果ではない。「謡舞の形成上」にあるような世阿弥伝書の緻密な分析や、より広くは第一部で展開されたような大和猿楽の歌舞能化全体を

見通す目があつて初めて、これほどクリアな成果が析出されたのだと思う。

同じく最近の論である「『三道』執筆以後の世阿弥の作風」も、動かない(だが今までは誰も調べてみなかった)事実を積み重ねて論を展開する。世阿弥伝書や自筆能本に見える世阿弥座関連曲を時代・風体別に分類して一覧し、そのうち「三道」以前成立の29曲を除く大部分が世阿弥晩年の作であることを確認するとともに、その晩年期の世阿弥の作風が「既成の様式を別風体に応用した新風体」だったことを示す。世阿弥晩年の作品の目録として扱われる『能本三十五番目録』の資料的価値については複数の説があるが、そのへんも抜かりなく、別稿(『能本三十五番目録』考)で同書の厳密な資料研究を行い、目録所収曲の大部分が「世阿弥引退前後を上限とする頃から、短期間の内に次々に成立したのであらう」ことを明らかにしたうえで、の論となつていく。世阿弥晩年期の複合的作風は後代に広く受け継がれたわけではなく、禅竹・音阿弥以降の能はむしろ「三道」に示された様式の安直な模倣が多いという指摘も、寛正以降に急激に数の増える能の作品を考えていく上での指針として貴重である。

既に紙数も尽きているが、第三部に収められた作品研究八篇についても少しだけ触れておきたい。雑誌「観世」に発表された一曲ごとの作品研究である。どの作品も、個別の問題に加え、この構想は他のこれこれの曲と共通、小段構成はこの類型、というように実に手際よく整理され、能作の歴史全体の中にはめ込まれていく。その見事な手際が氏の学問の強靱さ・精密さに支えられて

いることはよく判り、感服もするのだが、正直なところ、竹本氏の個別の作品研究を読んでも、肝腎の作品の魅力があまり伝わってこないことが、ままあるように思う。もちろん、第二部までに収められた素晴らしい業績も、個々の作品研究に基づいて全体を論じているものであり、竹本氏の作品研究能力の高さは証明済みである。にもかかわらず（あるいはだからこそ）、竹本氏の切れ味にばかり目が行って、切り刻まれさまざまな関連づけられた作品自体の印象は、相対的に薄くなってしまうような気がするのだ。だが個々の作品は、能作の歴史を説くための証拠としてだけ在るわけではないだろう。魅力とか、作品への愛情といった、主観的なもの、ディレッタントニズムにつながる要素は極力排除し、正統の文献学で貫けてきたのが竹本氏の研究だったことは十分承知

新刊紹介

榎本隆司編著

『ことばの世紀 ―新国語教育研究と実践―』

本書は「Ⅰ実践をめざす研究」と「Ⅱ教室での実践」の二部から成り、様々な実践経験をもつ十名（榎本隆司・岩佐社二郎・高野光男・佐久間保明・三浦康彰・石出靖雄・沢藤彦・有元秀文・永田正博・野村敏夫・横堀利明・岸洋輔・町田守弘・芳澤隆・伊藤博・犬塚大蔵）の論文を収める。タイトルの「ことばの世紀」は、豊かな生と世界へ開かれた公共性を獲得することの回復（創造）をめざすという、本書のモチーフをしめす。文学教育の根柢はここにあり、文学以外のメディアの教材化（新聞の投書欄、百貨店）や新た

している。が、当の竹本氏がこのような確固たる基盤を作り上げてくれた今となつては、やはりそれだけでは寂しい。個々の作品の魅力がどこにあるのか、能作史全体の中での位置づけだけではなく作品自体の中にあるものを深く考えるような作品研究を、我々もそろそろ目指すべきではないかと思うし、できることならそういう作品研究の見本も、やはり一つは竹本氏に示して頂きたい、虫のいいことを思うのである。

いずれにせよ、本書が今後、能の研究をする者の常に立ち戻るべき基本文献になることは間違いないだろう。画期的な御著書の刊行に心からの敬意を表して、拙い評を終える。

（一九九二 明治書院 A5判 六五六頁 一四〇〇〇円）

な授業形態（ティーム・ティーチング、マルチメディアの利用）の可能性など、国語教育をめぐる今日的なテーマが、豊富な実践報告と国語教育の理念的な検証との両方を含みつつ展開されているのが特徴である。教科の大幅な方向転換が進められている状況ともあいまって、文学教育の価値や、実践と研究との関係をお互い気運が高まっている。本書はそうした問題に多角的な光をあてていくこうとするものである。

（平11・3 明治書院 A5判 二六四頁 三三〇〇円）
〔菊地 薫〕

津本信博編

『新時代の古典教育』

本書は十二篇からなる古典教育に関する論文集である。中高に重複する教材である「竹取物語」の実践案を展開する大塚敏久論文。「伊勢物語」

簡井簡章段が教材化されるに当たって省略された箇所の問題を追求する松島毅論文。「狩りの使い」章段の教材化と実践案を提唱する竹内忠昭論文。「源氏物語」桐壺を「古事談」と併せ読む指導案を提起する次城健論文。「枕草子」と「古今集」を比較する五時間指導案を掲げる岩崎淳論文。随筆作品を教材として教授する上での問題点を説く津本信博論文。「木曾最期」の教材化における着眼点を指摘する浅田孝紀論文。高校における「おのほそ道」の具体的な指導案を提唱する大場重信論文。西鶴「武家物」の教材化とその意義を説く後藤芳文論文。和歌のグループ学習の実践案の山下文子論文。「甲斐談儀」と謡曲の教材化と群読を提唱する北林敬論文。漢文音読を提唱する中村佳文論文。

授業時間削減の中で、古典教育の将来と可能性を問う真摯な研究成果の報告である。（平11・3 早稲田教育叢書 学文社 A5判 二二三頁 一八〇〇円）
〔濱田 寛〕